

大島復興交流プログラム 概要報告

平成 28 年 11 月

大島復興支援東京ボランティアセンター

2013 年に発生した台風 26 号は、伊豆大島で死者・行方不明者が 39 名にもおよぶ多大な被害を及ぼしました。あの台風災害から実に 3 年が過ぎました。

大島では仮設住宅に入居されていた方も、全員、復興住宅など次の住まいへと移りました。とは言え、必ずしも災害が終わったわけではありません。町の復興、そして、頻発する災害への備えをどのようにしていくのか、これは大島だけの問題ではなく、私たち全員に共通する問題です。

今回の大島福祉まつりへの参加や被災地スタディツアーを通して島民の皆さんと交流を行なうプログラムを実施する中で、あの時の伊豆大島が、現在どうなっているのか、是非、その目で確かめていただくとともに、島民の方々との交流を深め、これからの防災について考えて頂ければと思います、プログラムを実施しました。

日 時 2016 年 11 月 4 日（金）～11 月 6 日（日）

場 所 大島社協福祉まつりの会場（役場周辺）、被災地域（元町 2 丁目～3 丁目、神達）など

内 容 （1 日目）

出発日 11 月 04 日（金）

22 時 00 分 A コース参加者東京竹芝港発（大型客船）

（2 日目）

活動日 11 月 05 日（土）

06 時 00 分 大島着（岡田港）

10 時 00 分 大島社協 福祉まつりのお手伝い（※会場設営や模擬店、パネル展示等）

11 時 30 分 B コース参加者集合

17 時 00 分 終了・宿泊場所へ（大島館）

20 時 00 分 交流会（希望者のみ）

（3 日目）

帰京日 11 月 1 日（日）

08 時 40 分 町役場職員から被災状況および復興に向けた取組みの説明

09 時 20 分 被災地域の散策（元町 2 丁目～3 丁目）

10 時 30 分 椿園の元女将さんより語り部

11 時 00 分 島内視察（神達散策、波浮港散策、ネイチャーガイド）

14 時 30 分 大島発（大型客船）※B コースはここで解散

19 時 45 分 竹芝港着・解散

※福祉まつりでは、大島復興支援東京ボランティアセンターとしてブース出展し、浪江焼きそばの提供を行った。また、土砂災害の様子やボランティアによる支援活動のパネル展示を実施。

参加者 20 名 ○参加者は広く公募するのではなく、大島復興支援東京ボランティアセンター関係者を中心に募集を行いました。

○参加費 A コース 1 万 5 千円（竹芝港集合・解散）

B コース 1 万円（大島元町集合・解散）

主 催 大島社会福祉協議会

共 催 大島復興支援東京ボランティアセンター

（構成団体）大島社会福祉協議会、国際協力 NGO センター（JANIC）、シャンティ国際ボランティア会（SVA）、東京災害ボランティアネットワーク、東京ボランティア・市民活動センター、東京 YMCA、日本青年会議所関東地区東京ブロック協議会、ピースボート災害ボランティアセンター

協 力 東海汽船、グローバル・ネイチャー・クラブ、大島町復興推進室、愛らんどセンター御神火温泉

参加者からの声（アンケート結果から主なものを抜粋）

◆ 1日目の福祉まつりのお手伝いについて

- ・最初はなかなか会話もなかったが、時間がたつにつれて、島民の方々が話しかけてくれるようになり、一緒に力をあわせて活動が出来た。
- ・ボランティアをきっかけに、外部の人間が大島を訪れ継続的に関わる意義は大きいと思う。「若者、バカ者、よそ者」が地域活性の要因として、よく語られるが、いい意味で「よそ者」として、これからも「バカ者」「若者」を連れて大島を訪れたいと思う。
- ・福島なみえ町風やきそばの選択がよかったのか、大変好評で行列ができ、結果完売できたこと。最後の後始末まで全員の協同作業でやり終えたこと。
- ・地域の方々と直接触れ合う貴重な機会でした。
- ・点字体験コーナーで一緒にした方々と、3年前の台風の話や三原山の噴火の話、それ以外の島の話などができ、打ち解けられたと思います。

◆ 2日目のプログラムについて

- ・復興計画とその現状説明、被災現場の徒歩によるツアー、ホテル椿園の経営者の体験談とこれからの展望説明、車による三原山頂上までのツアー等、それぞれが有意義であった。
- ・散策する事で大島の被災状況を知る事が出来た。語り部さんが「災害を忘れずに伝承して行く」事が防災力の向上につながるという信念の元、伝承されており、話を聴く事で逆にこちらが勇気づけられた。ネイチャーでは大島の大自然と美しさを感じる事が出来た。
- ・台風26号の被害から3年たったが、現地の爪あと（土台だけの土地、立派な門構えだがその門しか残っていない家だったと思われる土地）を見て、復興とは何なのか思わされた。
- ・元町神達地区の散策は、大島社協職員の解説もあり、土砂災害の軌跡がよくわかった。
- ・復興計画を実行するのは長い時間が必要と再認識できたこと。
- ・複数回参加しているメンバーには新鮮味に欠けるので、この点は今後の工夫を希望します。
- ・ツアーや個人旅行では行けそうにない場所に案内してもらい、また三原山などのいろいろな情報を教えてもらいとても参考になった。

◆ プログラム全体を通して

- ・全体的に盛りだくさんのプログラムでしたが、凄く勉強になり今後のボランティア活動に生かせるような気がする。参加者の方々と交流があり今後財産になると思う。
- ・椿園の元女将が語っていたように、支援に関わるボランティア一人ひとりの姿が被災された方の励みになっていること。そして、月日経っても未だ当時を思い出し、苦悩される被災者がいること。関わった被災地域と関係を継続していくことの大切さ。今回のツアーでは、これらを再確認させてもらった。大島での事例は、ぜひ今後の災害支援に関わる人たちに伝え、継続的な被災地との関わりが増えていくことを願いたい。
- ・今後の復興を見守る・見届けるだけではなく、別のコンセプトを設定が必要ではないか。
- ・町職員の話や語り部の方の話、被災現場の視察などは、年々復興具合が移り変わる中、今を知る良い機会なので続けたほうがよいと思います。



大島に着いた初日、大島社協の鈴木さんから土砂災害の概要と災害ボランティアセンターの取組みの説明を受けました。



今年の大島福祉まつりは第38回目。役場前の都道が歩行者天国に。島内の福祉団体がブース出展、島民およそ2,000人が参加しました。



参加者は島民の方々が出展するブースにお邪魔させて頂き、簡単な調理や売り子などのお手伝いをさせて頂きました。



大島復興支援東京ボランティアセンターは、なみえ焼きそばの販売と土砂災害時のボランティア活動の様子などを写真展示しました。



福祉まつり終了後の記念撮影。片付けもスムーズに終わることができました。お疲れ様でした。



2日目は被災地スタディツアー。被災地域を歩き、当時からの街の移り変わりを大島社協の職員から伺いました（写真は、大金沢の河口付近）



スタディツアーは2グループに分かれ、それぞれ土砂が流れ下った大金沢沿いを旧ホテルつばき園まで上っていきました（山に土砂の爪痕が見える）。



災害当時からの心境までをつばき園の元女将さんが話して下さいました。今年も新町亭という歴史的な建物をさせて頂きました。



今年は神達散策コースを追加。通行止めが解除された御神火スカイラインを通りました。写真は土砂崩れを起こした三原山の中腹。



また、今年もネイチャーガイドのコースを設けました。溶岩流の通った場所や三原山の噴火跡地を見学しました。



こちらは、波浮港散策チームの写真。



参加者が島を離れる際に、島民の方々がたくさん見送りに来て下さいました。